キブツの子供たち

第9回

M・E・スパイロ
訳・中村悦子

五章　親と親の代りの人と子供との関係（続）

■両親

愛情　両親は、子供の最も重要な愛の対象である。子供たちは、一日にほんの二時間、親と会うだけであるが、その二時間は、一日のうちで最も大切な時なのだ。グループの中では、子供は八人、あるいは、一六人のうちの一人にすぎず、みんなで保母の愛や注意を分かち合わなければならない。しかし、毎日のこの二時間、彼はその中で宇宙の中心である――彼のほんのちょっとした気まぐれもすぐによろこばれ、愛情ある言葉や行為が、彼の上にあふれる。彼は、大人つまり両親の注目を一身に背負うことになる。保母について、子供は「あの人たちは私たちのもの」と通常表現しているが、親については「あの人たちは私のもの」と言っている。

グループの中と両親の部屋における子供の体験を比較して、アーヴィンは、次のように書いている。

『三才以下の子供の刺激性のない、要求不満の多い環境、そして、メタペレットとの限られた身体的、情緒的な接触は、親との関係の強さや家族の部屋のもつ重要性を高めてきたようにみえる。』

グループの中で子供たちは、早い頃から自分の欲求を集団のそれに従わせるように期待されている。あえて言えば、従わせねばならない。彼は、自分の欲求をすべて直ちに満足させることはできないので、グループの情況は、高い欲求不満に耐えることを必要とする。しかし、親の部屋では、子供は日々ほしいままに、強い愛情や慈育の形で自我の満足を得ている。そして、もうひとつの親子関係の様相、つまり子供のしつけにおいて、親は二次的な役割をふるまうということが、子供のこのほしいままの態度を更に強めている。社会化を身につけることが衝動の抑圧を必要とするとすれば、社会化それ自身は、気持のよいものではない。その気持の悪さは、否定的な制裁を用いることでよけいに高まる。道徳観念テストにあらわれたのを見れば、子供たちは親を罰する人とは受けとっておらず、むしろ教師や保母とは実に対照的に、非常に寛大な人とみている。よい事をしたときにほめる人は誰か、名をあげるようにと聞かれて、子供（六才～一一才）は、教師と保母を一方ではあげ、片方では同じような頻度で、両親の名もあげている。しかし、悪いことをしたとき、それを批判する人は誰かと問われたときには、保母と先生の名をあげたが、それは両親の数の三倍である。つまり親の部屋は、子供の家よりもずっと許容的な雰囲気なのである。

二つの体験、つまり子供の家と両親の部屋との対比は、後者の重要性を強めることのみに役立つ。このように刺激が強く高い満足を与えるこの二時間は、子供にとって実に重要なものとなり、またその間の責任を持つ両親に対しては、特別な感情を持つのである。両親が、子供の発達にとって最も重要な影響をもつ人であるとみなすのは、この関係にある強さである。

子供の発達における両親の重要性は、親に対する子供の深い愛着だけをみても分かるが、キブツの社会化の構造的な関係の中でもみられなければならない。両親は保母とちがい、子供の環境の中で比較的安定した人物である。保母に対する愛着は、実際、たびたびさえぎられてしまう。保母は交代するので、彼らに対する未長い愛着は阻まれることになる。一方、子供の親は一定している。そして、保母の永続性が短かければ短かい程、両親の安定性は重要さを増す。このように両親は、子供の情緒の安定した引き受け手となるのである。

しかし、私たちは、子供が両親に対して抱いている愛着に関するこの考えに満足して立ち止まる必要はない。例えば、情緒反応テストでは、両親の演ずる役割は極めて肯定的なものである。両親が、怒り、怖れ、悲しみの源として名指されることは決してない。ただ、旅行、病気、死などによって親が不在の場合に、悲しみの反応があったり、悪いことのひとつとして取り上げられる。

両親に対する子供の愛着は、民俗学的観察によって確かめられるが、次の例はその中から無策意に選ばれたものである。子供たちは日中、自発的に両親のことを言いだす。二才の子は庭を歩きながら「おいで、お父さん」と歌い、三才の子は砂場で遊びながら「お父さんがいるよ」と歌う。もう一人の二才の子は夕食のあと庭にでて「お母さん、エイラットのところへおいで」と歌う。その他多くの子供が、気分が悪かったり何か欲しいときには、親の名を呼ぶのだ。確かに保母を呼ぶときもあるが、「お父さん」とか「お母さん」と言って泣いたり叫んだりする方が多い。つまり、親は保護者とか慰め手としてみられているのだ。

『代理の保母が、ニリィ（四才）に菓子をやるのを拒ばんだところ、ニリィは「私のお母さんは、私のことを可愛い子っていうわ、そしてお菓子をくれるわ。」と言った。』

『アモス（五才）が間違ってシュラに突き当たり頭にけがをさせた。すると彼は、長いこと「ママ」と泣いていた。』

多くの子供たちが、日中仕事場の母を訪ねる。自分の描いた絵をほめられると、これをもって母親のところへ行くのだという。保母

に叱られると、母親のところへかけつける。またある子は別に急の用事もないのに、母親のところへ行くのだという。保母を殺すとおどした四才の子がおり、もう一人は、保母の子供が泣くだろうから、そうはしないと言った。

子供はしばしば、他の子供の親を名指して、その子らを見わけることがある。ゼハヴァ（保母の名前）の娘が部屋に入ってきたとき、ツエヴィは「シュラがきたよ。ぼくたちのとこにもシュラがいるよ。ヤエルのシュラだよ。こっちはゼハヴァのシュラだ。」と言った。時には、幼児は次のように言う。「どのお母さんもわたしのよ。」そして、実際は他の子供の親であるのに、XとYはわたしの親だと言う子供がいる、と保母は報告している。

子供にとって親がどれほど大事かということは、仲間内の攻撃の言葉にもみられる。かんかんに怒った一〇才のリヴィは、仲間に投げつけるこれ以上攻撃的な形容を考えられず、「おまえのうちのものは皆、あした死んでしまえ。今日死んでしまえ。今すぐ死んでしまえ。」と言った。

子供が親に深く愛着している事実は、夕方親たちが子供を訪ねてきたときに、子供が示す喜びによく表われている。一日の最後の食事は、混とんと混乱がうず巻くことがある。というのは、子供たちが、もうじきやってくる親たちの迎えに興奮しているからだ。この興奮は、乳児の家の子供にもみられる。子供たちは親を見つけると、とてもはしゃぎだして、保母が食事を与えようとしても拒否してしまう。親が来ると、そこには笑いや喜びの叫びがあがり、あっちこっちへかけまわったり、抱きついたり、「ママー」「ダディ」というキーキー声が満ちあふれる。

親たちがやってきたときに、彼らをみて喜ぶが、それだけにくるべき時に親が見えないと、子供たちは大変不幸に感ずる。

『朝の九時近く、エステル（一六ヵ月）が泣きだした……なかなか泣きやまない……ハヤは抱きあげて、どうして泣いているのかと言った。だが、いつもならこの時間に母親がくるのだが、まだこないので泣いているのだろうと思った。』

日中親と離れていた後で、子供が親に会いたいとすれば、もっと長い不在の後では、その気持は倍加する。大きな期待を抱いて旅行からの帰りを待ちわびる。彼らが喜びの口調で、保母や仲間に語るのが聞かれる。「あと三日たつと」とか「あと二日たつと」「あした」「私のお父さんとお母さんは帰ってくるんだわ。」

この反応は非常に幼ない子供の間にも同様にみられる。次の例では、オムリの両親は二週間の旅行に出かけていて、保母がこの二才の子に今日彼らが帰ってくると語ったのだ。

『午後、オムリは寝台にいた……ドアがあいた、とオムリははね起きて叫んだ……ハナが入ってくるのを見て、オムリはがっかりして横になった……（その後）……ドアが開いてエッタがはいってきた。オムリはドアの音に起きあがり、目を大きく見開いてその方をみて――エッタを見た。そして横になり、窓の方を眺め、ぺちゃぺちゃ少しおしゃべりをした……（夕食のとき）オムリは突然泣きだした。ハナは慰めてさすってやった。彼は二本指を口にあてていた……エッタが窓からオムリの母を呼び、おはいりと言った。母がはいってきたが、オムリは気がつかない。母が彼の名を呼ぶと、くるりと向きをかえて笑い、興奮して手を振った。』

子供たちは親のくるのを待ち望むと同じように、（夜であろうと日中の短時間の訪問のあとであろうと）親が立ち去るのをみて落胆する。その時ほとんどの子供は泣かないが、泣く子もいる。そして幾人かは、親の去った後数分間泣いている。残念なことには、そのように泣いている状態がどのくらい続くのかということに関し平均値を示す資料はないが、一五分間ものあいだ行かないようにと親にたのみこみ、去ったあとでは「お父さん」「お母さん」とほぼ同じくらい泣き続けた例を記録している。

次の例は、日中母親が去った後での子供の反応を示すものである。

『プア（二才）は遠くに母を見つけ、「ママ」と叫び垣根のところに走っていった。母は「シャローム」と返事し、今は仕事中で訪ねる時間がないけれど、あとで会いましょう、と言った。それを彼女は何度も繰りかえし言った。とうとう母が去ったとき、プアは泣きだし、垣根のところに立って泣き叫んだ……プアはまだ泣き続け、垣をこえて行こうとした。』

子供の親への愛着を示す他の例は、親を自慢し彼らと同一化する様子に表われる。子供は、親の仕事を自慢気に話す。例えば「ぼくのお父さんはトラクターを運転するんだ。」とか「わたしのお母さんは鶏小屋で働いているのよ。」年長の子供は、大きくなったら父や母のしていることをするのだと言うだろう。遊びの中で、子供はしばしば親の行なっている役割をとろうとする。母親が看護婦をしているある少女は、〈病院ごっこ〉のときに、自分は看護婦になるのだと言い張る。電気技士の父をもった少年は、〈電話ごっこ〉のときに、電気技士になると言う。子供が親と同一化することを示す例はまだある。子供たちは親を思わせるような砂の人形を造る。絵本を見ているとき、大人の姿は、しばしば父や母と同一視される。

多くの子供が親に対してもっている肯定的な誇りは、彼らとの強い同一化を示すものである。ある日三才児の集団が散歩に出かけ、洗濯場の横を通った。

『ミミはゼヴィアに「あんたのお母さんの洋服が干してあるわよ」と言う。ゼヴィアはよろこび、保母のところへ走って行って自分が母親の洋服を見たことを告げた。』

『保母が、ハイム（ミリアムの父）がキブツ委員会でモシェの後任になったと話した。ミリアムは喜びに声を大きくして「わたしのお父さん。それはわたしのお父さんよ！」と言い始めた。』

『自転車が壊れたので、シェイク（アムノンの父）のところへ修理に出さなければならない、と保母が言った。アムノンは「シェイクのところ？」と聞き、保母がそうだと答えると、彼は誇らし気に「ぼくのお父さんのシェイクのところだ。」と言った。』

最後に、子供は親を権威をもった人物として認識しており、あるいは親を絶対的に競いあって自慢をする。

『ハナ（四才）が、アフリカからきた鳥は涼しい気候を好むと言った。そして他の子供たちが、その説明の真偽のほどを疑ったとき、彼女は「本当よ、お父さんがそう言ったもの」と答えた。』

『ナダヴ（五才）はポケットナイフを持っている。ニリィが自分の父は大きなナイフをもっていると言うと、ナダヴは、自分の父はよ

くきれるナイフを持っていると言いかえす。ボアズが自分の父は大型ナイフをもっていると叫ぶと、エステルは、彼女の父は鋭利なポケットナイフをもっているという。ボアズは自分の父もポケットナイフをもっていて、それを自分にくれると言った。』

親との同一化現象は、両親の部屋に対する態度にも見られる。どこに住んでいるのかと聞かれて、幾人かの子供は、自分たちのグループよりも親の部屋を名指している。同じように、ヘデル・シェリィ（私の部屋）という言葉は、子供の家を指すよりは両親の部屋を意味することの方が多い。一方、年長の子供の間では、〈私の部屋〉は〈私たちの部屋〉に変わってくるが、内容は同じく両親の部屋である。このように、九才のハナが休暇のことを話し合っているとき、それは「わたしたちが新らしい住まいに移ってから後よね」と言っていた。もちろん、新らしい住まいに移るのは彼女の両親であって、彼女のグループではないのだ。

親子の関係が深い愛着を表わしているからといって、子供たちが、両親と共に住みたいと考えていると結論を出すのは早計である。学令期の子供は、親の部屋で寝ることを好まない。一例として学校の寮の壁のぬりかえで、二晩両親の部屋に寝なければならないことがあった。このことがうれしいかと聞かれたとき、ほとんどの子供は否定的に答えた。また七学年の生徒が、新学期の始まった後一週間は、高校の寮には入れないといわれたとき、両親のところへ行くよりは今迄のところに居残りたいと主張した。

敵意

これまでの討議にもかかわらず、親子関係に敵意がないとは言えない、ということを強調しておこう。それのみか、ある子供たちは両親に対して否定的で敵意に満ちた感情を表現するのが見られる。時折、夕方親のところに行くのをいやがる子供がおり、その代わりに保母のところへ行く。五才の少女は、いつでも親を訪ねることを拒否しているが、誰にもその理由は分からない。親がきて、彼女を連れて行こうとするが、彼女は拒否し、保母と共に居残ることを選ぶ。またある子は、自分の母親にかなり直接的な敵意を表現する。

『エフライム（四才）は保母のみるところ、父親に深く愛着をもっている。ある日彼が両親についてしゃべっていたが、「ぼくはお父さんだよ。そして動物たちは、お母さんの方さ」と言っていた。』

もし〈動物たち〉が、少年の兄弟を意味するという推論が正しいとすれば、この叙述は母親への敵意だけではなく、兄弟へのそれも表わすことになる。最もあくどい嫌悪の表現は、次のような場合に起こる。

『四年生の授業のとき、先生が親子関係について話をしていて、皆は親が好きだろうと言った。アミールは、いつも話さない生徒だが、このとき発言し、教師の言葉を否定した。そして自分は親を好きではない、と言った。』

このような敵意の表現はそう起こるものではなく、肯定的な態度に比べれば無視してもさしつかえない。

安心感のなさ

子供が両親に反応し、彼らを認めるやり方は、保母に対するものと同様である――つまり、子供は両者の存在に、喜こびと愛着を表わし、

慰めと保護を求め、同一視し、時には憎むことさえもあることから、子供と保母の関係と子供と親との関係の間には、いったいどんな違いがあるのかということになる。もし喜こび、愛、誇りというような感情が量的なもので表わせるとしたら、子供は保母に対するよりも、親に対して一層多くの喜こびと、愛と誇りとをもっていると言えるだろう。子供の示す愛着の強さは、親の不在、兄弟の誕生、そして母親が保母でもある子供の行動に特に強く見られる。

キブツの子供が直面する親の不在には、三つの型がある。一つは日中の分離、キブツから一時的に親が出かけることによる不在、そして親の死またはキブツから脱退することによって生ずる永久の不在である。

日中、親と別れていることについて子供のもつ感情は、二つの観察から推論できる。一つは、多くの子供は自分たちのグループの中で満足しているように見え、親の不在に何ら悪影響は受けていないと思われる。しかし、既に述べたように、多くの子供が日中、両親特に母親を求め、それも何ら緊急な特別の用事もないのにそうするということ、そして自分のグループを離れて母を探しに出かけることが、かなりしばしばみられ、きまってもいるということは、グループ状況に満足をしていないのか、母親に対して安心していられないのか、あるいはその両者を示すものと思われる。幾人かの母親は、三才未満の全ての子供は、母親がいないという理由で安定していないという、そしてその一人の母親は自分の幼ない息子の住居近くで働けるような仕事を割り当てるようにと要求を出した。彼女がそこで働き出した初め、息子は母がそこにいるかどうか確かめに、毎日やってきた。しかし、数週間たつと彼は彼女の存在を認めて、もはや毎日は訪問しなくなった。この母親は、自分が息子の近くにいるようになったことが、以前に息子には見られなかった安心感をもたらしたのだと考えた。つまり、親の日中の不在は、少なくとも何人かの子供の心を乱しており、それは逆にいえば、子供の親への愛着のはかりともいえるだろう。

両親の一時的不在について子供がどう感じるかということは、全くはっきりしている。親の数日間の不在が、年長の子供の行動にはさしたる変化をみせないが、乳児の場合には影響を表わすことがある。数日間だけ両親がキブツを留守にした赤ん坊に、行動観察に表われる限りでは変化はない。しかし、一人の保母は、赤ん坊の行動には微妙な変化が起こり――それをうまく説明することは出来ないが確かに変化のあることは間違いなく感じ取ることができ――特に夕方の訪問の時間にそれが表われるという意見をもっている。数年の経験を重ねて、この保母は、赤ん坊は親が離れるとき、たとえそれが短時間であったとしても常に不幸な思いをしている、と結論づけた。

短かい不在からは表面に見られる影響はないとしても、一方または双方の両親が数日以上不在になることは、年長の子供の間にもいろいろな変化をもたらすことになる。このような別れに際して、子供の示す反応は、次のようなものである。

『グループの中で最も障害を表わしているのはイツハック（四才）で、彼はこれ迄満足な家庭生活を送っていなかった。一方の親がいつでもキブツを離れていたわけで――母親は訓練の為に町へ行き、父親は兵役についていた。三才のときには、双方共に二ヵ月以上留守にしたことがあった。彼は常に指をしゃぶっており、孤立した引っ込み思案の子供だ。

時には仲間と交流するが、いつでも彼らをいらいらさせ、身体的な攻撃を引き出してしまう。彼は仲間を怖れ、決して報復することはなかった。』

『アブラム（三才半）は、グループの中で一番攻撃的な子供である。母親は六ヵ月の間留守にして最近もどったばかりであった。母親がいなくなった後、以前は自制できていたのに、夜尿がみられるようになった。留守にする前は、他の子供に比べて攻撃的であるとはいえず、事実母親が去った直後は、全く受身的になり、何度も何度も保母に「ぼくはいい子？」と聞いていた。保母は、母の不在を慰めて、仕事が終わった後は自分の部屋に彼を連れていった。彼らが散歩に出るときは、アブラムは彼女のすぐ後を歩き、彼女が離れるといつでも泣き出すのだった。彼は、保母の子供にやきもちをやくようになり、今でも彼らを殺してやるとおどしたり、その子は「可愛くない」と言ったりした。

母親が去った後、彼は全く母の存在を忘れたかにみえた。ある日彼は女友だちに向かって、彼女の母親が自分の本当の母親だと話した。それを聞いた保母が、彼には彼の母親がいると言ってやると「ううん、ぼくはもうお母さんがいないんだ。」と答えた。

母親がもどる二、三ヵ月前、彼は極端に攻撃的になり、それが今日迄続いている。彼がいまだに安心感をもっていないことは、その他の兆候からもうかがえる。その一つは、彼は時を分かたずに仕事場に母親を訪問する。もう一つは、一日に何度も保母が彼を愛しているかとたづねながら、さまざまな愛の証を求める。朝、目覚ると、しばしば彼女に「今日はいい子でいるよ」と言う。過日私たちがそろって散歩に出かけたとき、郵便車の横を通った。保母が何の車かとたずねたところ、アブラムは「お母さんからぼくに手紙をもってくるの」と答えた』

キブツの母親の日記からの次の抜粋は、長い親の不在によって子供がどれほど苦痛をしのんでいるかを表わすもう一つの例である。この場合は、両親共数週間留守にした。当時この男の子はほぼ二才であった。感受性の強い母は次のように書いている。

『私たちは、ちょうどキリアット・ユディディムに帰ってきました。私たちの不在は、ヤコブにとっては大変苦痛のようでした。保母は、彼が幾晩も眠らなかったと話してくれました。ある夜、夜警の人が、彼が指をくわえて私たちの家の戸口に立っているのを見つけました。シュロモ（父親、母親より一週間早く帰宅）が家へ帰った時、彼は父親が夕方家から出るのをこばみ、去ったときは泣きました。私が帰ったとき、ヤコブは私を認めず、シュロモの方にかけていきました。今、夕方彼をおいていく時、いつも私に聞きます「もう決してぼくを置いていかない？決して？」彼は再びひとり残されることに深い恐怖を感じているようです。彼は指しゃぶりをするようになっています……私は彼が寝つくまでいてやらなくてはなりません。』

同じ男の子が、その後父親が旅行に出かけるときいた時、怒りを表わしたのである。その子は、あの当時より数ヵ月年上になったわけだが、母親に次のように言った。

『お父さんはテル・アビブに行った。みんながぼくのお父さんのことおこっているよ。お父さんはうそつきだ……（母親が、彼もおこっているのかどうか尋ねたところ、彼は）……どの子も自分たちのお父さんのことおこっているよ……と言った。』

これらの例は、一方または双方の親から一時的にせよ離れることが、子供に強く影響し、種々なあり方でその障害を表わすことを示している――恐れ、罪意識、攻撃、引っ込み思案、夜尿、指しゃぶり。その上これらの症候は、親が帰った後も長く続く。再び言うが、これらの障害は子供の親への愛着の強さをはかるものといえる。

この年令の子供の中には、一方の親、父から、死とか離婚（キブツを去ることによって）で永久の別れを経験した者もいる。この子供たちの行動を見ると、両親の存在が、キブツの子供にとっていかに重要かを推論することが出来る。

例えば、タマール（二才半）は、彼女の誕生前に父親が死亡していたのだが、グループの中で観察者と関係づけをもっていない唯一人の子供であった。タマールは幼ないにもかかわらず、自分には父親がいないことを知っていて、これを知っている苦しみは、かつて彼女が保母に語った空想話の中によく表われている。「ねえ」と彼女は保母にいう「わたしは、今お父さんがいない。だけど、昔わたしとお父さんが散歩にいった時、野原へ行ったのよ」（保母はこの幼ない子に何と答えてよいか分からなかった、そして最後に――そうね、昔お父さんが生きていて、あなたといっしょにいたのね、と返事をしたのだった。）タマールは後に、この空想話を友だちにも語った。

親が死亡した子供について、他の子供たちが困惑や好奇心を表わし、またその質問は少くとも自分の立場への幾分かの不安を語るものだということを注意しておこう。二才のハヴァは、ある日母親に尋ねた。「タマールのお父さんはどこにいるの？　悪い人だね。」他の五才児のグループは、シャウールに父親がないことを度々話題にして、彼にどうしていないのか尋ねた。ついに、シャウールは、保母に誰がそのことを説明してくれるかと質問した。

離婚による親の不在は、死亡によるものと同じような障害を示す。

『アムノン（五才）の両親は、彼が赤ん坊の頃離婚し、父親はキブツに住んでいない。ごく最近まで、アムノンは父親が訪問する時を除いて毎晩おもらしをした。最近これが逆になった。アムノンは今は排尿の自律ができたのだが、父親が訪問してくる時だけ、おもらしをする（父親への攻撃性か？）。』

親の不在が子供に引き起こす障害をみると子供の親への関係は、ひどく情緒的なものであり、親は子供の最も大切な愛の対象であることがわかる。子供の親への愛着を示すもう一つのはかりは、母親が保母をしている子供の行動に示される。この子供たちは毎日多いときは日に幾度も母親を訪ねる。そして訪問中の彼らの行動から、母親の仕事を、自分と母との関係をおびやかすものとしてとらえていることが見られる。例えば、ある二才児のグループの家は、その中の一人の子供の母親が保母として働いている乳児の家と隣接していた。だから彼は、一日中母親が自分たちよりも小さい子供を世話している様子を見ている。彼はこのことに大変心を乱されるようになり、母の姿を見かける度に泣くので、母親は息子のグループを他の住居に移して、そう度々息子が母親を見かけることがないようにしてもらった。

このような状況にある子供の行動は、親への愛着の強さを示すばかりでなく、親の不在

の場合と同様に、キブツの子供の情緒的障害——他の子供に対する自分の母親の母性的行動の認知——の重要な源を指適するものでもある。そして、この障害は、母親の行動によって強められる。保母として働いている多くの母親は、仕事場に訪問してくる子供たちを落胆させる。まず、子供がくるとうるさいと考えており、次には、特に幼ない子の場合には仕事の邪魔になるという。時にはしつっこく文句を言い、泣き、妨害し、また攻撃的になる——こんな子供の行動にいらいらして、母親は子供を叱り、あっちへ行って、もうくるんじゃありませんと言うようになる。このようにして、その子は、母親の仕事は自分よりも大切なのだという感じをもってしまう。このような場合は、拡大された兄弟関係と同じである。

両親が一番下の子——その子は殆んどの場合両親のお気に入りだが——概して彼に愛情を注ぐものだということは既に述べた。ここから年上の子の反応、私たちが〈退位〉と名付けた現象は、子供の親への愛着のはかりとなる。もし彼が深く親に愛着をもっているとすれば、彼は新らしい兄弟の誕生でひどく傷つけられるだろう。赤ん坊は、彼に対する親の愛の継続を明らかにおびやかすものだからだ。もし彼がそれほど親に愛着を抱いていないなら、新らしい兄弟は、彼をおびやかす者とは認められず、子供は障害を表わすしるしを示しはしない。

これらの全ての表われは、同じ結末を指示する。つまり兄弟間の反目（及びそれに伴なう兆候）は、キブツにおいて見られるばかりでなく、かなり強い程度で表われるということである。親が年下の子供をより可愛いがるということから推測されたように、兄弟間の反目は典型的に均合いを欠いたものであり、一般的にいって、年長児は、年少の子どもに敵意をもっている。

子供間に兄弟間の反目のあることは親も認めており、質問紙にも表われている。「あなたのお父さんの間に、兄弟間の反目をみますか」という質問に答えて、大多数は「見る」と答えている。二人また三人以上の子供をもつ親十三人中一〇人が、「確実にみる」また「多分みる」という項目に印をつけている。そして、この同じ解答者が、「あなたのお子さんは、下の子の誕生のとき危機を体験しましたか。」という質問に同様の答をする。つまり、十三人中八人が「確かにした」「多分した」という項目に印をつけた。

これらの数字を、観察とインタビューの資料から記録することは、比較的簡単である。弟妹への敵意は、赤ん坊の誕生から始まることが多い。アミール（三才）は、赤ん坊がいるときは両親の部屋にはいることを拒絶した。親たちが赤ん坊の名前を言うと、いつでも彼は怒り出した。ラヘル（四才）は赤ちゃんがほしいと母親に頼んでいた。しかし、赤ん坊が生まれると、父親に乳児の家には行かず、自分と共にいてほしいと願った。ツィヴァ（四才）は、赤ん坊が生まれるとき強い不安を示した。彼女はあらゆる創造的遊び（絵を描くこと、絵具を使うこと等）をやめ、運動遊びが出来なくなり、何をするにも助けを求めた。彼女は赤ん坊にひどく敵意を向けたので、両親は、兄弟だけでおいておくと、ツィヴァが文字通り赤ん坊を殺してしまうのではないかと恐れたほどだった。彼女は赤ん坊が両親の部屋に居るのを知ると、そこに行くことを拒否した。シュラ（十才）の問題は、妹が二年前に誕生したときからで、それから神経衰弱になったのである。赤ん坊に対する彼女のアンビバレント（同時に同一対象に愛憎を感じる）な感情は、彼らのやりとりのあらゆるところに見られ、その一つの典型的な例は次の通りである。

『シュラの母親は、赤ん坊と歩いている。シュラは彼らを見て走っていき、愛情あふれる大げさな言葉をいいながら、赤ん坊に何度もキスをした。赤ん坊は手にもっていたパン切れで彼女のほほをたたいた。すると彼女はとびあがり、赤ちゃんは悪いことをするのよ、と母親に不平をいった』

これらの例は、生まれた兄弟に対する小さい子供の反応の典型的なもので、この経験から生ずる不安を表わしている。しかしながらこれがもっと強く障害を表わすこともあり、そのひとつが次の事例史である。この事例は確かに極端なものかもしれないが、それゆえに、ある子供たちが、どれほど強く両親に愛着しているか、そして彼らが親の愛を失ったと思ったとき、どれほど深く障害を受けるかということを説明するものとなろう。

『エフライム（五才）は、弟を嫉妬し母親に敵意を向けた。というのも、母親が弟の方へ愛情を移したからだ。彼はある時、保母に言った。「お母さんはとってもいらいらしていて、僕のことをどなるんだ。」彼は父を強く好いていて、父親が休暇で外へ出たときは両親の部屋に行くのを拒否して保母のところへ行った。保母がどうして行かないのと尋ねたところ、父親がいないからと答えた。母親がいるのに、と言ったところ、彼は「お母さんは弟と一緒だよ。僕になんて気をかけないもの。」と答えた。弟が同じ部屋にいると、彼はみじめで引っ込みがちになり、いなくなった後に、やっといつもの彼にもどるのだった。彼の問題は、弟が大きくなり、父親の愛もこれまで以上に受けるようになって、いよいよ強められた。エフライムは母を失ったばかりでなく、今や父も失なおうとしている。弟が生まれたとき、彼は夜尿をするようになった。最近はなおったのだが、保母が一日以上グループをあけると、おもらしをする。母親は、エフライムのおねしょは自分が注意を向けるのが足りないからだと分かる。けれど日課の仕事と赤ん坊とに自分のもっているエネルギーと時間は全て費やされてしまい、エフライムまで手がまわらないのだ、と語った。』

『アミールとイェフダ（七才）は双生児である。赤ん坊のとき、アミールは可愛い子だったが、イェフダはそうでもなく身体が弱かった。誰もが——両親も親戚の者も——イェフダよりもアミールを好いた。例えば、兄弟たちも子供の家へ行くと、イェフダを無視してアミールだけをかまった。叔母は、アミールにきれいなジャケットを作ってやったが、イェフダには作らない。しかし二人が大きくなるにつれて、情況は変化した。イェフダは非常に利発であり、それに比べてアミールはどちらかというとおとっていることが分かった。両親の態度は完全に逆になり、イェフダがお気に入りになった。彼らは、アミールの面前で、イェフダを自慢するようになった。

明らかに二人はお互いに仲よくまじわれない。彼女は出来るかぎり二人を分離するように努めた——別の部屋で寝ること、食事の席を離すことなど。しかし、保母がグループをあけたとき、代りの保母は二人を一緒にした。保母はそれを「最後の結果の最初のきざし」と説明したが。というのは、アミールは、まずイェフダも同じことをしているかどうかを確かめない限り、何もしようとせず、イェフダの行動をすべて真似しようとした。

グループが正式な学習をはじめると、イェ

フダはメキメキ進歩したが、アミールは全く駄目だった。彼は自分の空想の世界に入り込み、外の刺戟を気にしない。さらに彼は、欲求不満に対してこらえがなく、すぐ泣き出す。そこで、アミールを小学一年から幼稚園へ移すことにした。そこでは、彼はグループの最年長児になる。

移ってから、アミールは今までよりも良く適応した。保母は、自分が大事なのだと思わせるように彼に責任を与え、彼はその責任を誇りをもって受けとめるようになった。赤ん坊時を過ぎはじめて、アミールは自分が愛され受け入れられていると感じるようになった。移ってきたばかりのときは、他の子供たちが自分を好きになってくれないと保母に不平をいった。しかし、遂に保母は、子供たちが彼を好きだと彼が信じられるように導いた。だが、これは容易なことではなかった。第一に、子供たち自身がアミールに対して愛憎なかばする気持をもっていたし、ましてアミール自身の愛情欲求が非常に強かったからである。と同時に、アミールも他の仲間にアンビバレントな感情を抱き、彼らをどなったり、保母に〈告げ口〉をしたりすることが多かった。

この研究が行なわれていたある日、子供たちがみんなで〈郵便ごっこ〉のあそびをして手紙を書いた。アミールは「ルティ（保母の名）は私を好きだ」という一行の手紙を書いた。このようにして、アミールは自分を助けてくれる一人の人間をやっと見つけることは出来たのだが、両親の愛を求める欲求は、いぜんとして満たされぬままになっており、今だに強いものであった。ある日、保母とアミールが歩いているとき、イェフダに会った。アミールが父親はどこにいるかと尋ねると、家にいるとイェフダが答えた。アミールは「僕のことときいていた？　僕がどこにいるかって、お父さんはきいていた？」と同じ質問を何度も繰りかえしたずねた。』

このように、兄弟間の反目および現実のあるいは空想による親の拒否から生ずるとみられる様々な兆候がある。これらのもの――敵意、引込み思案、退行、不安――は、子供が両親から分離されるときに表わすものと同じものといえる。だから、両方の情況とも、子供にとっては両親の剥奪ととらえられ、この剥奪は、かつての親の喜びが楽しいものであるだけに非常に苦痛に感じられるものだと思われる。実際、親のよろこびは、剥奪の情況と同じに子供が自己の情況を認知する根本のものとして意味がある。

兄弟間の反目の結果は、就学前の子供よりも学令期の子供の間に強くみられる。というのは、平均的なキブツの家族において、子供の誕生はかなり間があり、低学年の子供が下の子の誕生に出会うことが多いのである。従って気ままに育てられた期間が比較的長く、兄弟の誕生に伴なう「拒否」とそれに基づく要求不満はかえってきびしいものである。このグループのほとんどすべての情緒的問題は、兄弟の出現と兄姉の拒否にまでさかのぼることが出来る。その他は親の拒否にともなうものである。

結論を言えば、子供の両親に対する愛着は強いもので、それがおかされることは、どんな小さいことでも情緒的障害を生ずるということである。「情緒的に適応している」子供が、両親との関係をそこなっている例をみたことはなく、情緒的に不適応な子供が両親との関係をうまくやっている例をみたこともない。（つづく）